

---

# 愛嬌のある嘘

蜜ハチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛嬌のある嘘

### 【著者名】

蜜ハチ

N5252P

### 【作者名】

【あらすじ】

ヨーロピア系異世界／すれ違い／ハッピーホンダ／ラブコメディ  
ー？

「結婚しよう」と囁く幼馴染の彼と、それをいなす彼女のはなし。

「愛してゐよ結婚して」

今日も彼は、ウソツクから

私はニヒルに笑んでなんでもないフリをする  
だってそうでしょう  
でなけりや私あなた刺し違えたつていいのに

title：愛嬌のある嘘

部屋でお茶を頂く、異国の花茶でいいかおりがする甘いお茶だ。  
そのお茶に茶器も合わせたいところだが生憎庶民にはそこまでお金  
が回らない。  
けれど楽しむには十分だから私はゆっくりと口に含んでそれを楽し  
む。  
ああなんて至福。

「ねえコウタケちゃん、いつ結婚しようか」

「そうね、丘のうえの千年桜が咲いたらがいいなあ」

「…またそうやって」

……いらない茶々が入った。

彼、マクシミリオ伯爵…リオはふくらと頬を膨らます。

残念だけれど、それが通じるのはおぼこの乙女だけであり、大の人、しかも騎士たる男気溢れた彼に似合はずもなくさして心が揺れることもない。

その頬を両手で挟めば間抜けに口から空気がふくと抜けた。それを彼は恨みましくこちらを見るのだが、喜んでいるのは過去の付き合いによく知っていた。マゾめが。

この見掛けに反して子供のように話す彼はコーリアの幼なじみで、長年の付き合いになる。

きっかけはコーリアの父がリオの剣の先生をしていたことだ。

父は農夫の出でありながら、傭兵となり順調に手柄を立て最終的に王宮内一团の隊長という銘を得た。

その中、逆賊討伐の際に負傷した折りに暇潰しにと知人の息子の剣を鍛えていたのだ。

何を隠そうその息子がリオである。なんて簡単な話だろうか。

年の近い私達は遊べや歌えと子供の頃は転がるよつてひこりと遊んでいたらしい。（母による比喩である）

長年の付き合いと言つても彼はほどなく成長すれば騎士となるため行儀見習いで遠方へ連行された。

「ゴーリアの家がいいー！」と泣き叫ぶ彼が引きずられて行くのを見ながら、「ドナドナードナー…」と口ずさんでいたのはいい思い出だ。

それに父が哀れみの目で彼をまた見ていてもまた昔である。先に言つておこう、私は悪くない。

「ねえねえ、本当に。もつ若くないんだか」

「お安くなーいのよ、あたしゃ」

頬を引つ張つて可笑しな顔をさせて一人楽しむ。

優しい目が細く笑んでだらしない、えへへと笑つたのをキモい、と笑つてやつた。

なんだかんだで「こいつは」のやつとりが好きだからこんな馬鹿な遊びをしてるのだ。

こんなノコの男だから話すのはなんて楽しいのだろうか、見た目も

「リオの事あんな扱いすんのコウべりこだわ、  
「だからみんなに喜ぶのね、」  
「ザッシリートー」  
「アイシー、アイシー」

わかるよ、と田の前で優雅に茶をすする（畠葉に育ちの煙せがでち  
やうわ）ダンがケラケラと笑つた。

綺麗なもんだから一粒で一度おいしい。  
なんてエロな男だ。

ダンはリオと同じ王宮内で近衛騎士をしている。  
以前父の下にいたこともあり偶然知り合ったのだが話してて馬があり今でも他愛ない話をしている。

面白いのが彼の話によるどリオが王宮内で猫を被つているらしいのだ、それも無愛想な男前の猫を。  
凛々しく正義感溢れ逞しい騎士。

私はそれを聞いて爆笑し、私の話を聞いてダンが吹いた。  
そりやそうだ、だつていつも線の切れたようにへらへら笑つて子供みたいな喋りをするあのマゾ男が……  
いやあ、なんて楽しいんだろうか。

ちなみに2人はとある隠れた喫茶店で落ち合っている。  
何もないと言つても男と女、会つてることが知れたらことだ。  
それにこのダンもこんな気楽な奴だがなどるなかれお貴族様だからさりに面倒である。  
しかもとあるお嬢様に片想い中だといふから余計な事はしない方がいい。

あのマゾは堂々とコーリアの家にひょこひょこと通つが…仕方ない。

「でもさあ、もし本気だつたらどうするの？」  
「うーん、」  
「あるかもよ？なんだかんだ言つて」  
「ないと思つわよ、ミニアム嬢の事を教えてくれたのあんたじゃない、

「 わつなんだかじやー 」

うへん、と頭を抱える。何を今さう…

そう、あのリオはミニアム子爵令嬢といい仲なんだそうだ。へえ。  
オペラ座、舞踏会でもよく2人がイチャイチャするのが目撃され  
てこるらしい。

「 あいつも馬鹿よね、いくら私が庶民でそんなところに行かないか  
らってばれないと思つてるのかしぃ 」

「 知られてると思つたらさすがにプロポーズはしないね 」

「 だよね? 」

「 まさかあいつもここで僕等が逢引きしてゐなんて思わないだろ?  
ねえ 」

「 こままで駆け落ちしちゃう? ダーリン 」

「 あいつが地獄の果てまで追い掛けられそつだからやめて 」

手に槍持つて?といえばいやいやナタだといい、笑う。  
このテンポ好きだわあ、だから密会はやめられない。

「 ねえ、本当にさ、どうする? 本気だったら 」

「 またそのはなし? 」

「 いいじゃないの、ねえ 」

「 うへん、 」

私は悩むふりをする。

「千年桜が咲いたらね」

そう言うしかないのだ。

「 これらの女がいつ言葉

「 千年桜が咲いたら」

古く大きな桜が丘のうえにある。  
その桜はもうずっと長い間咲いたことがない。

千年咲かない桜、故に千年桜、  
だから女の言葉はブルーローズ、あり得ないはなし。  
丁のいい断り文句として使われる。

「 千年桜、青いバラ、あり得ない、なるわけがない...」

呟いた。

「 あなたと差し違えたっていいのよ

ゆーひや、ゆーひやと叫んだらずで私を呼ぶ頃から、あなたが好きだった。

遠くに行くつて嫌だつて泣き叫ぶあなたをどうして嫌いになれよつか、私に笑顔を向けるあなたを好きにならないわけがないでしょ。遠ざけられるわけがないじゃないか。

だからあの令嬢の話は、正直言つて、もう途方に暮れる。

そうね、お貴族様だものねだなんて表で物分かりのいいふりして。

なのに裏じゃ怒って、妬んで、恨んで、疑つて、自分が情けなくなつて、どうしたらしいの、私は貴方の事好きなのに、ねえどうしたらしいの！

行き場を失くして途方に暮れている、千年桜、ブルーローズ、ありえない話。

…丘の上、咲かない桜の下で雨宿りをしている  
私はいつも足元を見るしかないのだ。

なのにはこの男は何もないかのような顔をして、今日も馬鹿面でそんなことを何度もたまう。

「ねえ、ゆーちゃん、結婚いつにするの、結婚式会場はとあ、やつぱり森の中のチャペルがいいかなあ」

結局次の週もうこの男は現れていつして馬鹿で何にもならないやつとりをする。

ねえねえ、子供みたいに無邪気に。

こつちは知ってるのに、なんて馬鹿な奴なんだらつ、知つてたけど、なんて根性の悪い奴。

：：： 嘴呼。

「…ああ」

「…ゆーちゃん？」

リオがいぶかしげにこちらを見やる、いつもみたいに張り合つてこない私に気づいたのだろうか、少し心配そうに眉をひそめて、見上げて。

なんて頼りない、本当に、どうして私は

「しょつか、結婚」

… どんな男が好きなんだらつ

「ユーチャ…」

「でもあんた知つてんのよ、ミコアン嬢のこと。 irgendことしてないでわざとくつつきなこよ、いい年して…」

剣幕を張る、リオが困った顔をして見上げる、そうだね、いつもこんな怒ることなんてなかつたし、するつもりもなかつた！

「こなんとこ来て、疑われるわよ、本当にあんたつてふしだらな男ね、もうくんな！」

「ユーチャン！」

「いーから帰れ！話したくない！顔も会わせたくないーきらいだ、お前なんて大嫌いだ！」

「ユーチャン、待つて、行かないで、」

自室にこもりうどする私に抱きついて、リオはわたしを拘束する。帰れ帰れ！と連呼する私に彼は心底困ったようで声が困り切つていた、なんでわたしはこんなことで怒っているのだろうか、いつもみたいに笑つて済ませばいいのに、あのダンの話が頭の中でリフレインするのだ、ああ、ああ！  
お前なんて嫌いだ、きもちわるい！かえれ、かえれ！

そう叫ぶ私はいつの間にか泣いていて…リオはけれど私を放してくれなかつた、困るのならさつさと放してさよならすればいいのに、

中途半端に優しいヤツだ、なんて面倒な男なんだ。

「ユーリちゃん…嫌いにならないで…おねがい…やだ…」

「やだやだやだ!はなせこのばかおとこ!」

「やだ…やだ…ゆーりちゃん、ゆーりちゃん…」

リオがセウジュウと抱きしめて、私を胸の中にしまっておむ。

私はそのなかで、ずっとそれでも奴を叩きながら嫌いだ、嫌いだ、

と言つ。

心にもない言葉は、出したら止まらなくて泣きやうになる。

うせだよ、リオのこと嫌いになれるわけがないの!。

私はずっとリオの言う言葉も聞かずに嫌いだ、きらいだと言い続けた…。

ブルーローズ、千年桜、あり得ない話はもううりうりうりうりだ。



結局私はそのあと泣いて、叫んで、終いには泣き疲れて寝る、とい  
うなんとも苦い形でリオと別れた。泣いてて、気づいたらベッドの  
中なのだ…ああ恥ずかしい、21にもなつて。

「へえ、そんなことがあったの」

「そうなのよ、もう一度切れたら止まらないみたいよ私

「気をつけなきゃ」

「頼むよほんと」

「…」  
ユーのことじやないかあ！とわらう、恥もかきますだ。

結局また私はこの人とお茶を飲んでいる、今日は店特製のハーブテ  
ィーでローズがベースになつていて、他にも混ざつてあるのかと  
てものみやすい。

それからいろいろな他愛ない話をして、ダンがふと我に返つたような  
顔に成つて改めて

「リオンの事好きなの？」

「何を今さら」

「いや、だっていつも対応が冷たいから」

「…いや、あれは本人が喜ぶから」

「だって、いつも千年桜が咲いたらつて」

「ああ、それは……」

訳を話す、すると彼はロマンチック、ただそれだけ言つてお茶を飲んだ。



あれからもう一月たつが、彼は顔をださない。

所詮そんなもんだったのだろう、面白くなくなつたらそれでいいのだ、なんて後味の悪い別れ方だったのだろうか。

これは望みが薄くなつてきたなあ、と思うとどこかで期待していた私が浅はかでなんだか馬鹿らしくも可愛く思えた。なんだ、私も馬鹿だつたんじやないか。

そうなるといきなり現実が目の前に聳え立つ、いつもいつも言われていたが私は結構いい年なのだ、結婚適齢期にはギリギリ入つているのだが、賞味期限がまざい。

やばいぞやばいぞ、そうなるといきなり焦つてくるもので、今まで馬鹿にしていたお見合いもしてみようかなんて思つてしまつものだ。そういうえば今日は家に父がいるのだ、おう思い、私は善は急げで父の書斎に向かつた。



リオは部屋でソファーに優雅にくつひきながらダージリンを飲んでいた、彼はミルクも砂糖もたっぷりでいい茶葉なのに香りが薄くなるくらいたっぷり入れるのが大好きなのだ。

それに口をつけて、リラックス。傍らのそれに手を伸ばしゆっくと撫でる。ああ至福。

「どうゆうひとよ」

「だから言つてたじやん、結婚はいつがいいつで」

「聞いてないのよ」

撫でられたコウはその手をじゃけんに払いのけるが、そうするとリオはえー?とわざとくつついてきて抱きしめて終いには膝の上に乗せるなど嫌がるコウのことなど露知らずやりたい放題だ。

「あー、正式に許可せられたのあのコウちゃんが号泣し

「あーあーあー」

「…コウちゃんたらはずかしがりなんだから。シンナーでめー」

そう言って頬を頭にすりすりと寄せた。もむきん抱きしめで、コウはこの状況が面白い、こんなコウの手の上でじろじろと転がされているところの状況が、だ。

そう、あの父の晝斎に赴いたコーリアには衝撃の事実が判明した。

婚約していたのである、この馬鹿男と。

なんだとい？…と睡然としている父が笑いながら真相を教えてくれた。

「正式にはだなあ、あのお前がなきわけ」  
「あーあーあーあー」  
「前から内々には決めてたんだぞ？お前もてつきりその気なんだと…」  
「知らないわよそんなこと…」  
「言つてなかつたつけ？だつておまえこの年まで結婚しなかつたか  
「う

この娘にしてこの親ありである、親子そろつてなんと根性が太いもんだ。

「でもあいつ、そしたら浮氣?して・・・」

「ああー、お前よく知ってるのな。ありや任務だ。あのお嬢様の家が税金横領しててなあ。娘さんから近づいてつたってわけだ」

その瞬間、頭の中では鐘がゴーーーーンと鳴る、そして力の抜けた私に父は呟く「ドナドナドナー‥」なんどそのチョイスなんだ。

「にしてもユーちゃんにはわからないよ」にしてたのに、なんで知ってるの?」「言わない

「ま、いつか。ねえユーちゃん、結婚いつにする?早くがいいんだけど」「ああ、だから千年桜が‥」

ガシ、と肩が掴まれる。と思いつと真剣な顔をした彼が「ひらをジト、というかジ」と睨んでいる。

なんだなんだ。彼の顔が面白すぎるので、うれしくて蒼くなっている。

「ねえユーちゃんそれ本気だったの‥‥?」「はあ?」

「ねえなんで駄目なの！駄目だよ、絶対結婚するんだからー逃げられないよ腹くくつて」

「ちょ、ま、待って」

「ダメダメダメ！あ、そーだ、ちんぶさん、今ここで誓うだけ誓っちゃおう？ね？ね？」

「ちんぶさんてなんだ…若干卑猥じやない…」

「ああーもう、もう結婚するのは決まってるんだからだめだよー。」

「もう！あんたわされたの？！」

「ええ？」

すっかりパニックになっていたリオを揺さぶつてその顔を覗き込むがなんてわかりやすい男だ、顔にクエスチョンマークが浮かんでいる。ああ、笑える。

私が本当に笑っていたら、彼がわけがわからないようにうつろたえていたから、そつと真相を暴いてやつた。

「あんたね、ちっちゃい頃言つてたじやない、大人の真似して」

「え？え？」

そう、大人の断り文句「千年桜が咲いたら」という言葉は幼いころの私たちはそのまんまの意味で受け止めていた。

そう、私たちは桜が咲いたらあの別れたカップルや、振られた兄ちゃんもみんな結婚するのだと思っていたのだ。

「あ…」

「ちっちゃい頃言つてくれたじゃない」「千年桜が咲いたら結婚しよ  
つて

彼はやつと腑に落ちた顔をして、顔いっぱいの笑顔で私を抱きしめ  
る。

千年桜、ブルーローズ、ありえない話だけど、もしもの話もあるも  
のだ。

近い将来桜が咲くような気がする、そうしたら足元をみていた私は、  
桜を見上げて、あなたを待つのだ。

END

thanks! reading .  
image song / 椎名林檎「uncondition  
al love」

(後書き)

お読みいただきありがとうございます！

長編が書くにかけず、リハビリで書いてますが意外と気に入ってる  
一作です。

結構ヒロインがわがままでいい性格してますが気に入っていただけ  
たら幸いです。  
ではまた！

by31

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5252p/>

---

愛嬌のある嘘

2010年12月25日18時04分発行